

最終回では、葬儀社が行う「グリーンケア」の役割についてお話したいと思います。

公益社は昭和7年に創業しました。当時はグリーンケアという言葉はなかったものの、社員は葬儀の場で遺族の悲しみに寄り添ってきました。私たちが現場でいつも心掛けていたことが、こうあります。一つは、ご遺体に対する接し方です。常に故人の人間としての尊厳を守ることが留意をしております。対峙するときは「失礼いたします。お身体をきれいにさせていただきます」などと、故人に声をかけながら、接しています。

もう一つは、遺族に対する対応です。大切な人の死別直後、遺族の心はとても傷ついています。時には、その怒りが葬儀社に向けられることもあります。そのような状況であっても、すべてを受け止めることが、葬儀社の役割だと思います。

故人の尊厳を守るとは、故人の存在、故人の人生を尊重することでもあります。故人の存在とは、故人の人生観、人間関係、財産、記憶(思い出)などといったすべての総体です。良い葬儀とは、それらを含めて故人を偲び、お別れ

の場を持つことなのではないでしょうか。

ですから、近年増えている「家族葬」についても、費用がかからないという側面ばかりが強調されますが、大切なのは故人の人生を象徴する空間を、家族や故人と親しかった人たちが共有することだと思います。家族だけで葬儀を考える遺族の中には、「お父さんも定年から月日が経っているし、そんなに付き合えないから…」と言う人もいます。ですが、家族でも故人の人間関係を理解していないことは多いものです。葬儀の時に、家族が父親の意外な交友関係を知り、励まされたという例に私自身何回となく出会いました。家族の一員、そして社会や組織の一員という2つの側面を持っていることを忘れずに、故人を尊厳ある形で見送ることができるよう、葬儀を選んでいただきたいと強く願っています。

次に、公益社が導入している「エンバーミング」という新しい遺体衛生保全の技術と「グリーンケア」との関係性についてご説明しましょう。エンバーミングとは、遺体を消毒や特殊な技術を用いて保存処置したり、修復することです。

現在、当社で執り行う一般葬において、エンバーミング処置が施される割合は半数以上を占めています。エンバーミングを経験した遺族の多くは「生前の面影をどめた故人と最後の対面ができたこと、最愛の人の死を認めること

ができた」と言います。

例えば、交通事故などで顔の損傷が激しく近親者にも見せることができないような場合、以前ならそのまま納棺していました。しかし、大切な人との最後のお別れができなかったことを何年も引きずってしまふ人は少なくありません。エンバーミングを施し、遺体

と対面することは「死の受容」につながることも多いのです。

エンバーミングの利用が増えたもう一つの理由に、病院で亡くなる人の増加も挙げられます。特に終末期医療の実態として、患者本人そして家族の希望として、あらゆる延命治療が行われることがあります。しかし、体に栄養補給の点滴や化学療法の薬剤などが投与される延命治療に終始すると、人間の身体は自然な状態ではなくなり、その結果、病原菌の繁殖などにより、家族や遺体に接する葬儀社の社員にとって危険な状態となっていることもあるのです。その事実についてはあまり知られていません。

私たちが「ひだまりの会」の活動から学んだ大きな成果は、葬儀社が地域の社会資源と連携することで、遺族支援の可能性が大きく広がることに気がついたということです。

新しい試みとして病院との連携に取り組んでいます。病院側が亡くなった方の遺体移送業務を葬儀社に依頼するという一方的な関係ではなく、公益社がエンバーミングで培った遺体のケアに関するノウハウを、病院に提供することで連携しようとしています。

## 地域との連携に新たな可能性

エンバーミングには、遺体を衛生的な状態に保てる利点もあり、表取締役社長・古内耕太郎(燦ホールディングス・公益社代表)が、病院や自宅療養をしているときからすでに始まっています。葬儀社と病院との連携は、生前から死別後まで、長期的な視点で逝く人と見送る遺族を支えることができる、新しいグリーンケアの流れを創り出すことができるのではないのでしょうか。(終わりの)

## 遺族の心に寄り添う

ひだまりの会の軌跡

### 第5回

現在、当社で執り行う一般葬において、エンバーミング処置が施される割合は半数以上を占めています。エンバーミングを経験した遺族の多くは「生前の面影をどめた故人と最後の対面ができたこと、最愛の人の死を認めること



### 本紙読者にプレゼント

連載のベースとなった著書「グリーンケア」(毎日新聞社刊)を、本紙読者5名様にプレゼントします。送付先住所、氏名、電話番号と本紙への感想を明記の上、「グリーンケア・プレゼント」係へ(FAX03・3351・1939又はpost@silver-news.com)。7月8日まで。

# 生前から始まるグリーンケア